

介護福祉学生の就業意欲に関する研究

— 10年前との比較 —

Study on the Desire to Care Work of College Students — Comparing the Results of Past Investigation —

真野 啓子 仲村 正巳 壬生 尚美 小木曾 加奈子
Keiko MANO Masami NAKAMURA Naomi MIBU Kanako OGISO

本研究は1994~1996年(以下1994年当時とする)と2007~2008年(以下2007年現在とする)の介護福祉学生の入学動機や卒後の希望などの比較を行い、就業意欲に関する学生の動向を把握するとともに、入学後の学生の就業意欲の変化について調査することを目的とした。

その結果、2007年現在では「絶対に介護福祉士になりたい」という学生は1994年当時と比べて減少していることが明らかになった。しかし、介護職に就きたくないというわけではなく、1994年当時と比べると介護福祉士以外に取得できる資格が増えたため選択肢が広がっていることが結果に影響しているということが考えられた。また、学生は入学後、実習や学生生活を通して就業意欲が高まっていることが分かった。教員は学生が自己実現を目指すことが出来るように学習の指導はもちろん、日頃から介護の仕事の尊さや魅力を伝え、さらに介護職への就業意欲を高める指導を行う必要がある。

キーワード：介護学生 就業意欲 意識の変化

1 はじめに

1987年5月に社会福祉士及び介護福祉士法が成立し、1988年4月から介護福祉士の養成が始まった。厚生労働省の調査によると介護福祉士の登録者数は728,309人(2008年7月現在)、介護福祉士の養成校は2008年4月現在で434施設(507課程)、定員25,407人である。しかし、介護福祉士養成校の定員充足率は2006年(71.8%)、2007年(64.0%)2008年(45.8%)と入学者の減少傾向がみられる¹⁾。介護の現場では大手介護事業者の介護報酬不正請求の発覚²⁾や介護職の厳しい労働条件、人手不足等のマイナスイメージの報道が相次ぎ、養成校の定員割れに拍車をかけている。高齢化の進行に伴い介護保険制度や法律の改正など社会の介護ニーズへの関心が高まるなかで、介護職を目指す学生が減少していることは介護職員の減少につながり、労働条件の悪化、介護職離れという悪循環が懸念される。

1-1 介護福祉士の登場とイメージ

社会福祉士及び介護福祉士法が成立した背景には高齢化の進行がある。特に後期高齢者人口の増加は社会福祉のあり方を大きく変えた。「施設中心」の福祉から「在宅福祉」を重視するようになったことにより、福祉サービスの内容が多様化し、高度な水準の介護が求められるようになり、誰もが安心して福祉に関する相談や介護を依頼することができる人材が必要になった³⁾。このように増大する在宅介護ニーズの充実・強化を促進するために

社会福祉士及び介護福祉士の資格制度を定めると共に、専門的な能力及び知識を有する人材を養成し確保していくため同法律が創設された。

しかし、「介護」は家族がもっぱら担うべきという考え方が強いことや、介護は誰でもできる、素人でもできるといった誤った認識が定着し、介護職のイメージが良くならなかった。こうした認識の改善を図らなければ超高齢社会への対応が不可能と危惧されていたことから、1991年には、社会福祉協議会から「介護職はすばらしい」仕事であるというイメージを定着させるために「介護職」のイメージアップのための提言⁴⁾が提出されている。

1-2 介護福祉士を取り巻く社会福祉制度の動向

社会福祉士及び介護福祉士法の制定後、20年の間にわが国の社会福祉制度は、2000年に介護保険制度、2005年に障害者自立支援法が創設され、措置制度から利用者の自己選択と自己決定に基づく契約を基盤とした制度に大きく転換した。さらに認知症や医療ニーズの高い重度の高齢者が増加するなか、地域における新たなサービス体系の確立や国民生活の安心を支える持続的な制度を構築するため、2005年(平成17年)には介護保険法が改正された。このように制度体系の見直しとあわせて、多様化・高度化する国民の介護・福祉ニーズに的確に 대응することができる質の高い人材を安定的に確保していくため厚生労働省は、社会保障審議会福祉部会の

「介護福祉士制度及び社会福祉士制度のあり方に関する意見」(2006年12月12日)等を踏まえ、社会福祉士及び介護福祉士法の一部を改正する法律が2007年12月5日付けで交付された。

こうした社会的な変化によって養成校の教育内容も介護現場で求められる実践能力の形を目指した新たなカリキュラムによる教育が2009年からスタートすることになった⁵⁾。

1-3 介護福祉士の現状と課題

(財)介護労働安定センターの調べによると、「介護労働実態調査 平成19年度」介護労働者は約117万人いるといわれている。しかし、介護分野に従事する者は、介護という仕事に対するやりがいや希望を抱きながら職業生活をスタートする者が多くみられるものの、離職者が多く、介護福祉士47万人のうち、実際に福祉・介護サービスに従事している者は27万人に留まっている。また、若手人口の減少、介護労働者の厳しい労働条件、人手不足等のマイナスイメージの報道を背景として、介護福祉士等の養成施設においては定員割れが相次ぎ、介護福祉士養成校から介護関連福祉分野への就職率の動向を見ると、2004年では88.3%だったが、2007年には86.4%となっており、介護関連分野への就職率はやや減少傾向となっている⁶⁾。

2 目的

本学における定員充足率も2006年(110%)、2007年(90%)、2008年(68%)と減少傾向が認められ、中途退学者は過去4年間のデータによると、年間平均7名となっている。

このように介護職離れの進むなか入学してきた学生は介護職に就くことに関してどのように考えているのか、また、入学後に就業意欲に変化があるのか、どのようなことが意欲の変化に影響するかなどについて教員が理解を深めることは、一人ひとりの学生が介護職の魅力や可能性を発見させ、介護職への就業意欲を高める指導を行うためにも有効と考える。また、社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律の中には「求められる介護福祉士像」⁷⁾としての12の目標が掲げられており、今後、これらの介護福祉士像を念頭に介護の仕事を生涯の仕事として誇りをもって働くことができる学生を育てることは介護教員の大きな課題である。

壬生ら(1997)⁸⁾によって行われた「社会福祉学科入学生における志望動機調査」において、当初と比べると介護福祉士になりたいという意欲に低下傾向が見られ、入学したものの何を指すべきか分からない、あるいはどうしたらいいか分からないという学生が増加しているのではないかと述べた。

本研究では、入学してくる介護福祉士学生は実際に介護職に就くことについてどのように考えているのか、入

学後に学習することによって介護職への就業意欲は高まるのか、また入学後の学生の就業意欲はどのように変化していくのかを明らかにする。

3 方法

3-1 調査対象

調査対象は1994年度～1996年度の入学生304名及び2007年度～2008年度入学生のうち、本研究の趣旨を説明して了解を得られた学生130名の計434名とした(表1)。

表1 対象者の属性

入学年度	男性	女性	合計
1994～1996	0人	304人	304人
2007～2008	19	111	130
計	19	415	434

3-2 調査内容

3-2-1 志望動機調査

入学動機や卒業後の希望、就業意欲などの変化について比較するために、壬生ら(1997)の調査と同様の内容とした。調査は1年次の7月と2年次の11月に実施し、2年次には就業意欲の変化に関する項目を追加した。以下の①から⑧は調査内容について説明した。

①年齢と性別

4月現在の年齢と性別を選択肢から選ばせた。

②入学動機

本学に入学しようとした動機を18項目挙げその中から5つ以内選ばせた。

③取得希望資格

取りたい資格は何かについて介護福祉士国家資格と社会福祉主事任用資格を挙げ、「はい」「いいえ」で回答を求め、取ろうと思った動機については自由記述とした。

④満足度

本学にどの程度満足しているかについて「大いに満足している」から「大変不満である」までの5段階で回答を求めた。また、どのような点が満足(不満足)かについては自由記述とした。

⑤介護福祉士になろうという意欲

介護福祉士になろうという意欲について「絶対になりたい」「できたらになりたい」「どちらでも良い」「あまりなりたくない」「全くなりたくない」までの5段階で回答を求めた。

⑥介護福祉士としての適性

自分が介護福祉士として適していると思うかということについて「非常に適していると思う」から「全く適していない」と思うまでの5段階で回答を求めた。

⑦卒業後の希望

卒業後の希望について10項目挙げ、その中から選択させた。

⑧就業意欲の変化(後期のみ追加)

入学後に介護の仕事に就きたいという意欲に変化があったかについて「非常に変わった」から「全く変わらない」の5段階で回答を求めた。変わった人にはその理由を書かせた。

3-2-2 入学後の就業意欲の変化に関するインタビュー

1年次後期に研究の趣旨や方法を説明し、理解と同意を得られた学生6人を対象とした。内容は入学動機や入学後の意欲の変化、学習意欲の高まる要因など半構成的グループインタビューを行なった。さらに2年次後期には、同じ学生に個別インタビューを行い、その時点での就業意欲について聞き取りを行った。

3-3 処理

入学動機、取得したい資格、満足度、介護福祉士になりたい意欲、卒後の進路、就業意欲の変化については1994年当時と2007年現在の学生を比較した。意欲の変化については自由記述の内容をKJ法により分類し、カテゴリー化して内容を整理した。インタビューについては、1年次と2年次の就業意欲の変化を縦断的に分析した。

3-4 倫理的配慮

倫理的配慮については質問紙調査では、無記名で性別だけを記入してもらい、本研究の主旨、個人が特定されたり、不利益が生じたりすることはないことを書面および口頭で説明した。

インタビューの対象者には研究の目的や方法、参加の自由、データは取り扱いに注意を払い、個人情報漏洩しないようにすること、この研究以外に使用しないことなどを記載した書面を提示し、研究参加への同意書に署名を得た。

4 結果

4-1 1994年当時および2007年現在の入学志望動機

今回配布した質問紙は153部で、研究参加に同意を得られ、欠損があるものを除いた130部(2007年度生77部、2008年度生53部)を結果の分析の対象とした。(有効回収率85%)

1994年当時と2007年現在のデータの比較を行うにあたり、壬生らの調査結果を引用し、1994年～1996年の入学生の合計と2007年～2008年の入学生の合計を対象とした(表2)。また、当時は女子短大であったが、現在は共学のため男性も調査の対象とした。

1) 入学動機

1994年当時の入学動機は「資格を取っておきたい」が

77%、「福祉の施設で働きたい」が64%、「専門的知識・技術を身につけたい」が55%であった。2007年現在の学生は「資格を取りたい」が65%、「お年寄りの世話がしたい」が42%、「他人に喜ばれる仕事をしたい」が40%であった(表2)。

表2 入学動機の1994年当時と2007年現在の比較

入学動機	1994～1996	2007～2008
資格を取っておきたい	77% (235人)	65% (85人)
卒業後、社会福祉の施設で働きたい	63 (190)	35 (45)
社会福祉の専門的知識・技術を勉強したい	55 (168)	28 (37)
将来自分の親や祖父母に役立つ社会に役立つ仕事がしたい	43 (133)	32 (41)
自分の個性や能力を生かせる仕事をしたい	42 (127)	40 (52)
他人に喜ばれる仕事がしたい	28 (85)	18 (24)
お年寄りの世話をしたい	28 (84)	40 (53)
障害者(児)のお世話がしたい	27 (81)	42 (55)
卒業後、公務員として働きたい	19 (57)	13 (17)
新しい分野の仕事	13 (41)	2 (3)
経済的に安定した生活を送りたい	13 (40)	2 (3)
他の専門分野を志望したが入学できなかった	7 (20)	5 (7)
両親が勧めてくれた	6 (17)	1 (1)
高校の先生が勧めてくれた	5 (17)	11 (14)
女性向けの専門的資格が取れると思った	4 (13)	8 (10)
ただ何となく	3 (8)	1 (1)
その他	2 (7)	7 (10)
	1 (4)	5 (7)

2007現在の入学生における性差を比較してみると、男性は「社会に役に立つ仕事をしたい」63%が一番多く、次いで「資格を取っておきたい」40%「自分の個性や能力を生かせる仕事がしたい」32%であった。女性は「資格を取っておきたい」69%が一番多く、次いで「お年寄りのお世話がしたい」44%「他人に喜ばれる仕事がしたい」42%「卒業後、社会福祉の施設で働きたい」38%であった(表3)。

2) 取得希望資格

取得したい資格を比較してみると1994年当時の学生は介護福祉士国家資格が98%、社会福祉主事任用資格が89%であったが、2007年現在の学生は介護福祉士国家資格92%、社会福祉主事任用資格33%であった。社会福祉主事任用資格については1994年当時のほうが有意に高かった。性差については男性は介護福祉士国家資格が86%、社会福祉主事任用資格が14%、女性は介護福祉士国家資格が73%、社会福祉主事任用資格が27%であった。

表3 2007年現在における入学動機の性差

入学動機	男性	女性
社会に役立つ仕事がしたい	63% (12人)	36% (40人)
資格を取っておきたい	40 (8)	69 (77)
お年寄りの世話をしたい	32 (6)	44 (49)
自分の個性や能力を生かせる仕事をしたい	32 (6)	16 (18)
将来自分の親や祖父母に役立つ	32 (6)	32 (35)
社会福祉の専門的知識・技術を勉強したい	26 (5)	29 (32)
高校の先生が勧めてくれた	26 (5)	5 (6)
他人に喜ばれる仕事がしたい	26 (5)	42 (48)
卒業後、社会福祉の施設で働きたい	16 (3)	38 (42)
両親が勧めてくれた	16 (3)	10 (11)
経済的に安定した生活を送りたい	11 (2)	5 (5)
新しい分野の仕事	10 (2)	1 (1)
障害者(児)のお世話がしたい	5 (1)	14 (16)
他の専門分野を志望したが入学できなかった	5 (1)	0 (0)
卒業後、公務員として働きたい	0 (0)	3 (3)
女性向けの専門的資格が取れると思った	0 (0)	1 (1)
ただ何となく	11 (2)	7 (8)
その他	11 (2)	5(5)

表4 取得希望資格に関する
1994年当時と2007年現在の比較

資格	1994~1996	2007~2008
介護福祉士国家資格	98% (302人)	92% (128人)
社会福祉士主事任用資格	89 (270)	33 (43)
	N=304	N=130

3) 満足度

満足度について1994年当時と2007年現在を比較してみると、「大いに満足している」が1994年時も2007年現在も8%で著しい違いは見られなかったが、「一応満足している」が1994年当時は37%、2007年現在の学生は42%であった。「どちらでもない」学生は1994年当時が33%、2007年現在の学生は37%であった。「大いに満足」「一応満足どちらでもない」「どちらでもない」と答えた学生を合わせると1994年当時は78%、2007年現在の学生は87%の学生が入学後の学生生活にあまり不満を持っていないということが分かった。「少し不満」と感じている学生は1994年当時の方がやや多いことが分かった。その理由として1994年当時はまだ設備が十分整っていないため、冷暖房の設備がないことや、食堂・介護実習室の設備が不十分であることが挙げられていた(表5)。

表5 満足度に関する
1994年当時と2007年現在の比較

満足度	1994~1996	2007~2008
大いに満足	6% (18人)	8% (11人)
一応満足	37 (110)	42 (54)
どちらでもない	33 (98)	37 (48)
少し不満	22 (64)	9 (12)
大変不満	2 (6)	4 (5)

4) 介護福祉士になりたいという意欲

介護福祉士になりたいという意欲については、1994年当時は絶対になりたいが67%、できたらなりたいが26%であり、93%の学生が介護福祉士になりたいと答えていたが、2007年現在の学生は絶対になりたいが33%、できたらなりたいが51%であり、なりたい学生は84%であった(表6)。

現在の介護福祉士になりたいという意欲は1994年当時と比べると、2007年現在の学生は入学後3ヶ月の時点で介護福祉士になりたいという意欲は低い傾向が見られた。

表6 介護福祉士になりたいという意欲に関する
1994年当時と2007年現在の比較

項目	1994~1996	2007~2008
絶対になりたい	67%人(207人)	33% (46人)
できたらなりたい	26 (78)	51 (62)
どちらでも良い	3 (8)	12 (15)
あまりなりたくない	3 (8)	4 (5)
全くなりたくない	1 (2)	1 (2)

5) 意欲の変化した理由

2年次後期に実施した「就業意欲の変化の理由」の自由記述の意見は、「実習に行って就きたいと思った」「専門的な勉強をして介護職に就きたいと思った」の2領域に分かれた。「実習に行って就きたいと思った」66%(37人)の領域は『実習から感じた介護の必要性』25%(14人)、『実習から介護の楽しさを理解』20%(11人)、『実習から感じた介護福祉士のやりがい』16%(9人)、『ありがとうという言葉の重み』4%(2人)、その他2%人(1)であった。「専門的な勉強をして介護職に就きたいと思った」、34%(19人)の領域は、『学ぶ楽しさからスキルアップを23%(13)、『これからの社会に必要な介護福祉士』10%(6人)であった(表7)。

表7 「介護職に就きたい」「一応就職しようと思う」と意欲が変化した学生の理由

分類	下位分類	主な内容
専門的な勉強をして介護職に就きたい 34% (19)	学ぶ楽しさからスキルアップを目指す 23% (13)	専門的な勉強をすることでより楽しさが分かった
		どんどんスキルアップしたい もっといろいろ勉強して利用者の人と関わっていった方がいいと思うようになった
	これからの社会に必要な介護福祉士 10% (6)	資格を頑張ることでそれを生かして仕事をしたい
		これから先必要になってくる職種だと思った これからの社会では介護がより必要となるため就きたいと思う
実習に行って就きたい 66% (37)	実習から感じた介護福祉士のやりがい 16% (9)	実際に実習へ行ってやりがいを感じたため
		実習を行って行く中で利用者に関わることができやりがいがあると考えたから
		実際に施設で利用者の方と触れ合ってみて良い仕事だと感じたから
	実習から感じた介護の必要性 25% (14)	実習を通して現場に出てもっと深く知ることができ、自分も人の助けになりたいと強く思ったため
		今の介護の現状などを実習を通して知ることができた
		実習を通して介護の必要性を身をもって体験できた
	ありがとうという言葉の重み 4% (2)	高齢者に心からでなくて「もありがとう」の一言を言われるだけでもうれしくて辛くても就きたいと思った
	実習から介護の楽しさを理解 20% (11)	実習などに行ってもっとお年寄りの方と接し介護したいと思った
老人とのふれあいが楽しくやっぱり介護の仕事に就きたいと思った		
実習をしてみてやっぱり自分はお年寄りの人が好きだと改めて思った		
その他 2% (1)	何かで働かないと生活できないから	

N=56

4-2 インタビューの結果

1年次後期の段階では、消去法で介護の道を選んだ学生、まだ自分のやりたい仕事ではないという思いが強い学生や、初めての実習が苦痛だったため不安がある学生がいた。しかし、中には家族や親戚の期待もあり意欲的に取り組んでいる学生、祖父母が倒れたら自分が世話をしたいという学生も複数いた。また、どんな時に学習意欲が湧くかという質問に対し、「些細なきっかけでやる気が出る」「褒められた時」「自分で成長が感じられたとき」などに意欲が湧く。また「教員がやる気がないと学生もやる気が出ない」という意見もあった。2年次のインタビューは就職も決まった学生もおり、プライバシーにも配慮して個別で実施した。その結果、2年次では全員の学生が就職に向けた活動を行っており、迷いがあった学生もすでに就職先も決まり楽しみにしていることが分かった。以下に個々の学生の変化をまとめた。

学生Aは実習は実習日誌などの課題も多く大変であるが利用者がいたから頑張れた。将来はユニットケアで働きたいため、最初は従来の施設で働いて介護の力をつけたいと将来の豊富を述べた。

学生Bは親や親戚からも期待され、自分自身も介護職に就きたいと思っていた。学習を深めることで益々自分の知識や技術の未熟さを感じ、さらに自分を高めたいという思いを述べた。

学生Cは消去法で介護の仕事を選択した学生が実習でお年寄りの「ありがとう」の感謝の一言で介護する喜びを実感し、進路選択の理由のひとつとなった。また、1年生のころからキャリアセンターに頻りに足を運び、介護職の雇用の状況や雇用の条件について調査して自分の希望や環境などの条件を考慮して職場を決定した。

学生Eは入学当初は就きたい職業が別にあり、介護職に関心を向けることがなかなか難しかったが、実習で尊敬できる介護福祉士に出会ったことで自分の目標が見つかり、介護職に就くことを決断し、すでに就職先も決定した。給料が安くても人間関係が良いところで楽しく働きたいと、具体的な目標を持つことで働く意欲を高めていた。

学生Fは小学校時代に老人ホームの見学に行き、高齢者の叫び声を聞いて怖い思いをしたことから介護の仕事にはやや抵抗があったが、入学後の実習で高齢者と積極的に関わることで怖いというイメージが払拭された。さらに排泄物なども汚いとは思わなくなり、むしろ綺麗にすることが楽しみになった。将来はケアマネージャーの資格も取得したいと意欲的であった。

1年次と2年次のインタビューの結果とコメントを一覧に示した(表8)。

表8 1年次と2年次の就業意欲の変化(6人の学生のインタビュー)

学生	入学動機	1年次(2007/11実施)	2年次(2008/10実施)	コメント
A	<ul style="list-style-type: none"> 小さいときから祖父母の介護をみてきた。 母が看護師 介護福祉士になりたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 第1段階の実習が大変だったので第2段階のことを考えると憂鬱。 日誌が嫌だった。 利用者さんが待っていてくれるのでそれは良かった。 入学後の影響はあまり無い。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習が厳しくて介護の仕事が嫌になったけれど、利用者がいたことで癒され頑張れた。 暴力行為や拒否があった利用者が最終日に泣かれた事が嬉しかった。 人と関わる喜びを感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> 看護師の母の姿から仕事の厳しさはある程度理解しているものと思われる。不安もあるが、やりがいのあるユニットケアの介護がしたいと意欲がみられる。
B	<ul style="list-style-type: none"> 小学校から福祉の仕事がしたかった。 人に役立つ仕事をしたかった。 祖父母の世話がしたかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学前よりやりたいと思うようになった。 大学に入ってやりたい幅が広がった。(ピアヘルパー、手話など) 大学で勉強して身内の介護に役立てることを期待されている。 知識が増えて役に立つ。 	<ul style="list-style-type: none"> 介護の仕事をした気持ちは全く変わらない。 就職の前に改めて介護の仕事の大変さを感じる。 寝たきりの方の残りの人生を楽しくしてあげたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 家族や親戚にも期待されることから、自分の役割を認識しており学習意欲も高い。 知識が無く祖父母の介護が十分できなかったことが学習意欲に繋がっている。
C	<ul style="list-style-type: none"> 消去法で選択した。 小3の頃からボランティアをしていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習に行ってお年寄りの世話が楽しいと思えるようになった。 夜勤がつかうそう キャリア支援センターの「仕事と人生」の授業で福祉の仕事に興味を持てた。 最近では以前よりやる気になってきて福祉の方に進もうかと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 資格も取ったし、親にも短大に行かせてもらったので働こうかなという気持ちで2年間の就業契約で勤める。 利用者にありがとうと言ってもらえたことが嬉しかった。 介護職の給料が安いのが不安 自分を生かせる資格を活用して働きたい。 	<ul style="list-style-type: none"> 消去法で選択した進路ではあるが、実習で利用者と関わりを持つ中で介護職に少し興味が出てきたと思われる。 介護の仕事について客観的に捉えたり、現状を認識したりする姿勢は大切。
D	<ul style="list-style-type: none"> 祖父母の世話をするのは自分しかなかったです。 2年で介護福祉士の資格が取れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 同じことをめざしている仲間がいるのでやる気が出る。 将来の仕事は介護しか興味がない。 サークルや他学科の友達もでき学校は楽しい。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習でいろいろ任せられ自信がついた。 仕事をしていくのは人間関係が一番大切だが実習と違うので就職後、上手くいくなが不安。 利用者が可愛いと感じるので頑張れる。 	<ul style="list-style-type: none"> 同じ目標を持った仲間がいることで頑張ることができ、友達がいるから学校が楽しいというように、人間関係が何よりも大切であると考えている。
E	<ul style="list-style-type: none"> 祖父母が好きだから自分が看たいと思った。 高校の先生に勧められた。 	<ul style="list-style-type: none"> まだ添乗員になりたい気持ちがどこかあるので悩んでいる。 辞めようとは思わないがやりたいことが違う。 	<ul style="list-style-type: none"> 素敵な介護福祉士の方の出会い、あんな人になりたいと思った。 楽しく働きたい 夜勤があった方が職員や利用者との仲良くなれる。 	<ul style="list-style-type: none"> 入学当初は自分のやりたいことは介護ではないという思いがあったが、憧れの介護職員を目標とすることで就業意欲を高めた。
F	<ul style="list-style-type: none"> 他学科の試験に落ちたから。 人の世話をするのが好きだから。 	<ul style="list-style-type: none"> 最初は全くやる気はなかったが大学に入って頑張ってみようと思う。 今も障害児関係の仕事に興味があり、買う本も障害児関係が多い。 とりあえず卒業はする。 実習では可愛いおじいさんがいてお年寄りが嫌ではなくなった。 	<ul style="list-style-type: none"> 実習にあって介護の汚い・怖いというイメージが無くなった。 おむつ交換が楽しくなった。 資格も取れるだけ取りたい。 将来はケアマネも取りたい。 実習前は思いこみがあったが今は就職も決まり嬉しく思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 幼い頃の怖いイメージが実習に行くことで払拭され、今は便も汚いと思わなくなった。介護職に就くことを嬉しく思っている。

5 考察

5-1 入学動機、資格取得の意欲と卒後の希望の動向について

介護福祉学生の入学後における介護職への就業意欲の変化を知るために、1994年当時と2007年現在の学生について比較・検討した。

入学動機に関しては、10年前と変わらず「資格を取っておきたかった」という理由が一番多かった。関口(2001)は、「介護・社会福祉の学生は他の専門職と比べると資格を取るために入学する意識の学生が多く、技術や知識などの専門的知識を習得して社会に役立つ人物になりたいという思いも他の専門学生より強いと考えられる」⁹⁾と報告している。介護福祉士の国家資格は1990年のゴールドプランにおいて福祉人材の養成と確保の必要性から社会福祉士、介護福祉士、保育士の3職種が制度化されている。介護福祉士養成校では卒業要件に介護福祉士国家資格取得があるため、当然の結果といえる。次に多い入学動機は、1994年当時は「福祉の施設で働きたい」「専門的知識・技術を身につけたい」であり、就職と結び付けていることが伺われる。1994年当時は「介護の仕事は新しい分野の仕事」であることから「社会福祉の知識や技術を身につけて」「福祉施設で働きたい」という期待があり、入学を志願した学生が多かったと考えられる。その背景には「介護職のイメージアップのための提言」(1991)が提出された後であり、介護職はやりがいのある素晴らしい仕事であるという啓蒙活動の影響があったのではないかと考える。「絶対に介護福祉士になりたい」という意欲が1994年当時は2007年現在と比べると高いことや、社会福祉士主事任用資格も取得しておけば公務員になるチャンスも増えるという期待もあって介護福祉士国家資格と社会福祉主事任用資格の両方取得しておきたい学生が多くいたと考えられる。

しかし、2007年現在の学生は「お年寄りの世話がしたい」「他人に喜ばれる仕事をしたい」であり、まだ生計を立てていくための職業としての認識はなく、「ただ何となく」という学生も1994年当時と比べると多い。とりあえず資格は取りたいが、介護職に就くという意識がなく、漠然とやりがいを期待して入学して来たことが伺われる。

1年次のインタビューを行うことによって、殆どの学生が小学生か中学生の総合学習の時間で老人ホームや障害者施設のボランティアや高齢者とのふれあいを体験しており、将来は福祉の仕事につきたいと思ったのもこの時期であることが分かった。2007年現在の学生が小学生であった平成8年頃から「ゆとりの教育」が重視されるようになり、地域の住民と触れ合ったり、職場体験をしたりするなどの経験をしていた。そのため、多くの学生が地域の老人ホームの訪問や施設のボランティアでお年寄りや障害者の介護体験をしたことがある学生が多かった。しかし、小学生や中学生の段階では職業に関す

る知識や情報も少ないため、親や高校の先生のアドバイスのもとで進路を選択してきたものの、自分が介護職として働く実感が無いのではないかと考えられる。そのためとりあえず資格だけは取っておこうと考えている学生が多かったのではないかとみられる。

介護現場は離職・転職者が多いことや低い給与など、相変わらずマイナスイメージが払拭できない現状であるが、2007年現在の学生は「お年寄りのお世話をしたい」「他人に喜ばれる仕事をしたい」という思いがあることは、実習や職場で利用者との触れ合いのなかで達成感ややりがいを感じる可能性があると考えられる。

「絶対に介護福祉士になりたい」という学生が減少していることについては、最近ではさまざまな資格制度ができ、本学においても、社会福祉主事任用資格、レクリエーションインストラクター、福祉レクリエーションワーカー、ピアヘルパー、手話奉仕員、ケアクラークなど多くの資格をとることもできるようになった。1994年当時はまだ社会福祉主事任用資格のほか取得できる資格はなかったため、介護福祉士と社会福祉主事任用資格の取得に集中した結果と考える。

卒業後の進路希望では1994年当時は「老人福祉施設」「在宅介護」「福祉行政分野」と具体的に回答する学生が多く、卒業後の進路を具体的に考えていることが分かる。また、「在宅介護」を希望する学生が多く、「施設中心」から「在宅中心」の考え方が学生にも定着してきていることがいえる。しかし、在宅介護への就職希望者が1994年当時は13%であったが、現在は、2%と減少している。これは在宅介護に認知症や障害の重度化した利用者が増え、介護者への責任や負担が増大していることを懸念した結果ではないかと考える。また、2007年現在の学生は「老人福祉施設」以外は複数回答が多く、入学しても進路については決定できていない学生が多いことが分かった。また「その他」を選択した学生の約半数はデイサービスを希望していた。最近では入浴サービス、福祉レンタル関連などの福祉事業経営施設に就職する割合も増えてきており、デイサービスは夜勤がないことや重度の要介護者も少ないというイメージがあることから選択したのではないかと考える。

5-2 入学後の介護職への就業意欲促進について

10年前の学生との比較から、統計的には介護福祉士を目指す学生が減少しているが、学生のインタビューを通して就業意欲の変化を知ることが出来た。また、学生は学習をすることで介護の仕事に対する愛着が湧いたり、理解が深まったりすること、そして学生自身も卒業後に介護職に就くために個々に努力をしていることが伺われた。さらに、実習では利用者へ癒されたり、励まされたり感謝されたりすることで介護のやりがいを感じたという学生が多いことが分かった。

しかし、自分の抱いていたイメージとの相違を感じ

介護職以外を選択するなど、介護の仕事に意欲を感じなくなった学生も若干いた。介護福祉士の資格をとろうと思った動機は「資格があれば就職の際に楽だと思った」「資格を取って損はないから」「資格取得が卒業要件だから」など8人中6人は資格取得が目的である。卒業後の進路については、殆どが進学や一般企業を選択していた。今回は中途退学者については触れなかったが、このように福祉系短期大学に入学したものの、志半ばにして介護職に就くことを断念して別の進路を選択していく学生もいることも現実である。

介護の仕事は資格があればできるというものではなく、常に相手の立場に立ち、個々の利用者の心身の状況に応じて必要とされる支援を実践するために専門的な知識や技術が求められる。そのため入学後の授業の課題や実習について丁寧な指導が行われることから、安易な気持ちで入学した学生や自分に合わないと思う学生もいる可能性もある。そのときは進路についてももう一度じっくり考え直すことも必要なことである。

最近の介護福祉学生は、資格取得の目的のほかに、「お年寄りの世話をしたい」「他人に喜ばれる仕事がしたい」「社会に役立つ仕事がしたい」というように、実際に介護の仕事を通してやりがいを得たいと考えていることは好ましい傾向で、就業意欲に繋がる可能性があると考えられる。教員はこれらの学生が自己実現を目指すことが出来るように、学習の支援はもちろん、日頃から介護の仕事の尊さや魅力を伝え、さらに介護職への就業意欲を高める指導を行う必要があると考える。

6 結論

1. 「絶対に介護福祉士になりたい」という学生は10年前と比べて減少している。これは当時と比べると介護福祉士以外に取得できる資格が増えたため就職先の選択肢が広がっていることが影響している。
2. 目的意識が少なく入学した学生の場合でも実習や学習を通して介護のやりがいや必要性を感じることであれば、就業意欲も高まる
3. 介護職の雇用の状況や雇用の条件を自ら把握することなど、学生自身も就業意欲を高めるために努めている。

文献

- 1) 横幕章人：基調講演1 社会法人日本介護福祉士会 養成施設協会 全国教員研修会資料 23 2008
- 2) 中日新聞：生活図鑑2007.7.10
- 3) 三ツ木任一 山田知子：社会福祉の方法 放送大学 教材 1996
- 4) 全国社会福祉協議会：介護マンパワーイメージアップ検討委員会提言「介護職」のイメージアップのための提言について 1991
- 5) 厚生労働省社会・援護局長：社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律について 社援発第1205003号(平成19年12月5日) 2007
- 6) 厚生労働省：介護労働者の確保・定着率に関する研究会中間とりまとめ案 2008
- 7) 成田裕紀：介護福祉制度のあり方について 厚生労働省 2006
- 8) 壬生尚美・仲村正巳：社会福祉学科入学生における志望動機調査 中部女子短期大学紀要26 307-316 1997
- 9) 関口義：専門学校在学者の実態と意識に関する基礎的総合的な調査報告研究報告書 2001